震災復興期と新心理主義文学

――横光利一「高架線」再読

野中　潤

一、はじめに

一九二〇年代末の浅草を舞台に不良グループの少女を追いかけながら最先端の時代風俗を活写した川端康成の『浅草紅団』（先進社　一九三〇年十二月）は、モダニズム文学の傑作と目されてきた。しかし東日本大震災の後に『浅草紅団』を読み直したときに見えてきたのは、瓢箪池で鯉の麩を食べる男や公園の便所を熱心に掃除する子どもたちなどの作中人物の風変わりな行動が、モダニズムのような歴史学的な概念によって理解しうるものではなく、むしろトラウマとかサバイバーズギルトなどの心理学的な概念によって解読可能なものであるということだった（1）。たとえば、浅草の仲見世が鉄筋コンクリート造で再建されたのも、都内各地に造られた復興小学校が鉄筋コンクリート造を採用したのも、モダニズムのなせるわざであるという以上に、震災の、あるいは震災復興期のなせるわざである。人びとは、地震によって倒壊したり火災によって焼失したりしない堅固な存在として鉄筋コンクリート造を選び取ったのだ。だとすれば、『浅草紅団』において鉄筋コンクリートで造られた便所を子どもたちが偏愛するのは、自分たちを守ってくれる揺れにも火にも強い存在への固着を起こしているからだと考えることができる。言い換えれば、地震や火事に対する木造家屋のもろさを大人と

いう存在の儚さと重ね合わせ、自分たちを庇護する人間の代替物として堅固な便所にすり寄っているということである。

『浅草紅団』のような小説をそんな風に読み直すことができるとすれば、一九二〇年代後半の私小説にも大衆小説にも「震災後文学」としての相貌を見出すことができるかもしれない。「モダニズム文学」や「新心理主義文学」が持っていた「世界的同時性」なるものも、「震災後」という枠組みの中で捉え直すことができるのではあるまいか。

阪神淡路大震災から二十年、東日本大震災から四年経ったが、「震災後」という時間は今なお現在進行形である。一月十七日の早朝、三宮駅に到着する始発電車のドアからは、大量の人びとがホームに降り立ち、無言のまま改札口を通り抜け慰霊と復興のモニュメントが設置されている東遊園地まで黙々と歩く。そして今なお、午前五時四十六分に合わせて黙祷を捧げ続けている。東日本大震災による原発事故の影響はもちろん簡単には解消しないし、津波の被災者に遺された心の傷も簡単に癒えるものではない。だとすれば、関東大震災からわずか七年程度しか経っていない一九三〇年前後に横光利一が書いたテクストに、関東大震災の傷痕が刻印されていても不思議ではない。「新心理主義文学」なるものを、「震災復興期」の文学として読み直した時にいったい何が見えてくるのか。それは、震災後四年という現在から新心理主義文学を問い直す試みである同時に、一九三〇年前後という同時代コンテクストの中において、新心理主義文学というラベルを貼られた小説群がいったいどのように受容され得たのかを問い直す試みでもある。

ここでは、しばしば「鳥」（『改造』一九三〇年二月）、「機械」（同、九月）などとともに、横光利一が新心理主義文学への展開を見せた時期の小説として論じられてきた「高架線」（『中央公論』一九三〇年二月）を取り上げ、そこにどのような形で震災が影を落としているのかを考察してみたい。

二、「高架線」の世界

横光利一の「高架線」に登場する主たる作中人物は二人いる。「鉄の角柱の集り」によって地上に造られた「長い洞穴」に住む浮浪人たちを巡回警備する高助（たかすけ）と、高架線の下を走る旧線（貨物線）の踏切番をしている保市（ほいち）である。高架線が竣工すれば鉄の洞穴がなくなって浮浪人はいなくなり、高助は御役御免となる。同様に、踏切は不要となり、踏切番の保市は職を失う。二人のうち「彼」という代名詞を使われることがあるのは高助だけであり、保市を視点人物とした描写も皆

無ではないが、叙述の大半は高助を視点人物として展開されている。ただし高助は、高架線が竣工すると自分が馘首されるということをすぐに理解することができない愚鈍な人物として描かれている。したがって高架線工事をめぐる社会状況にも目配りをしながら叙述を進める語り手は、作中人物の認識し得ないことをも語り得る三人称客観視点に立っていると言える。この点において「高架線」は、「私」という一人称が使われている一九三〇年の他の三つの短編小説、すなわち「鳥」「機械」「鞭」(2)とはやや異質な作風であるとも言える。ただし、玉村周が指摘しているように(3)、「穴」に落とし込まれた人物が描かれているところに「機械」との共通点が見出せるし、渥美孝子が言うように(4)、垂直構造が小説の結構を作り出しているところに「鳥」との共通点も見出せる。また、「喘息友達」でもある高助と保市は、時に発作によって身体を共振させるのだが、苦悶しながら床の上を転がり廻り、地面にへばりついて汗に濡れた顔面に灰を浴びた様子は、暗室の前で軽部に床の上に投げ倒されてカルシウムやアルミニュームの粉末を顔面に付着させて苦悶する「機械」の「私」を想起させるところがある。

まだある。生コン工場がない時代にあってミキシングプラントを現場に設置してコンクリートを製造していたはずの「高架線」の世界では、高助と保市だけではなくて洞穴の中の浮浪人たちが一斉に喘息の発作を起こす。これは、高助の発作が浮浪人たちの身体を共振させた場面であるようにも見えるが、コンクリートの製造による環境汚染が多くの身体を蝕んでいることを暗示した場面であるとも言える。使い道のない人間を落とし込む穴のような場所であるとされているネームプレート工場で、塩化鉄に身体を冒されながら働く「私」のありようとよく似ているのではないだろうか。

昼になると、此の静かな洞穴を中心にして、上と下の世界は最も活動を続け出す。上は高架線の作業場で下は地下鉄の作業場だ。高架線では、数台のコンクリート混合機が砂利と砂とセメントを食いながら、絶えずねば〳〵したコンクリートを吐き出した。一輪車のネコトロが樽と樽との山の間を、縦横に辷っていく。セメント銃が漆喰の窪みを狙って、コンクリートを吹きつける。杭打ちの煤煙とセメントの粉が、追っ駈け合って渦を巻く。圧搾機のモーターの爆音と、リベッティングの釘打ちと、投げつけられる鉄材と、――攻め上がって来る音響の中で、起重機の翼が悠々と廻転する。

葉山嘉樹の「セメント樽の中の手紙」(『文藝戦線』一九二六年一月)がセメント工場の労働災害を描いていたとすれば、横光利一の「高架線」は鉄道工事の現場のセメント混合機や杭打ちの煤煙による健康被害を描いていたことになるのだ。しかも「セメント樽の中の手紙」で被害を受けるのが労働者の物理的な身体であるとすれば、「高架線」で被害を受けるのは浮浪人の生理的な身体なのである。デアテルミイによってリカ子の身体が火を付けられることになる「鳥」やウィスキーや砒素による身体への作用が乙竹と「私」のドラマを作り出していく「鞭」に通じるモチーフを見て取ることができると言えよう。

さらに注目すべきは、常軌を逸した人物、奇妙な言動を繰り返す人物が登場するという共通点である。たとえば「機械」の場合、三つにもならない子どもを偏愛し「これは狂人ではないか」と「私」に思わせる「主人」は、「金銭を持つと殆ど必ず途中で落として了う」という性癖(?)の持ち主である。活動写真が「人生最高の教科書」で探偵劇と現実の区別がつかなくなっている「軽部」は、新しくネームプレート工場にやってきた「私」に執拗に監視の目を光らせている。暗室の前で「私」に対する暴力をエスカレートさせていくあたりを含め、常軌を逸したところがある人物だと言えよう。いや、それはもちろん語ることによって具象化されている人物像なのだから、むしろ「軽部」に対してそのように疑心暗鬼になってしまっている「私」の異常性を告げ知らせるものであると言うべきなのかもしれない。

「高架線」の場合は、主要な作中人物である高助や保市よりも奇妙なのは、浮浪人として素描される人びとである。

浮浪人の中には一人の若い女が混っていた。彼女は男を選ばなかった。触った男が忽ち彼女の餌になった。一人の老人は髯を垂らして娘と孫を連れていた。胸から肩へ帽子を幾つも連らねたまゝ、いつも洞穴の口に立っていた。マッチの空箱ばかり集めている男、女の化粧道具を小腋にかゝえて柄のついた鏡ばかりを覗いている男、炭で地べたに絵ばかりを書いて喜ぶ男、乞食の夫婦、必要以上に着物を身につけ、いつも片手に下駄を持っている老人、五分おきにモルヒネ注射をする大工――洞穴の中には、拾って来た鍋やタオルや残飯や、男達の延びるに任せた頭髪で掃溜のような匂いがした。

社会的な関係性から切断され、高架線工事現場の「洞穴」に「風に吹き寄せられた塵埃(ゴミ)」のように集まってきたこれら

の人びとは、いかにも奇妙である。そして、これらの浮浪人の常軌を逸したありようの中に、浮浪人になる前の家族関係や社会関係の痕跡が見て取れる。マッチの空箱や女の化粧道具、鏡、着物や下駄への固着には、それぞれの浮浪人の来歴が暗示されているかのようである。これらの人びとには、浮浪人というラベルだけではなく、「機械」の主人同様に「頭の欠陥」とか「狂人」といったようなラベルがむしろふさわしいようにも見える。それは例えば、同時代の次のようなルポルタージュが書き留めた被災者の言動と類縁性を持っている。

なんだつて（大聲）おれに何を聞いたつてわかるものか、てめえたちやそんな涼しい顔しやがつて、ちつとは己れの身にもなつて見やがれ（酒氣を帶ぶ）おれの家の話なんか出來るもんか、聞きたけりや焼跡へ行けやい。

なあに!!皆んな死んだかつてか、べらぼうめ、家の奴が生きてピンピンしてりや、己は酒なんか飲まねえ、神佛を信心して働きさへすりや、家内安全と朝から晩まで働いてたのだ（涙ごゑ）もうやけだ、いくら地震だつて火事だつて子供の一人や半分ぐれえ助けたつてよからうじやねえか、おれか、おれは工場でやつてゐたよ（泣くこと久し）工場のやつが歸れつて言ふから歸へつたんだ、家も、兄弟も、かかあも子供四人黒こげにしやがつた。（頭をうなだれて深いため息）

なに外にもそんなのがあるつて＝ママ、うそつけ日本中でおれの家が一番ひどいや、一文も銭はねえし、へこ帶一つないんだ、一家全滅があるつて、それがなんだ、それがどうしたつて云ふんだ、一人殘らず焼き殺してくれりやこんな苦勞はねえ、なまじおれ一人を殘しやがつて黒こげの死体を見付けられりや氣も狂ふぢやねえか。（しきりに泣く）

定村青萍（國夫）編『大正の大地震大火災 遭難百話』（一九二三年十一月、多田屋書店）

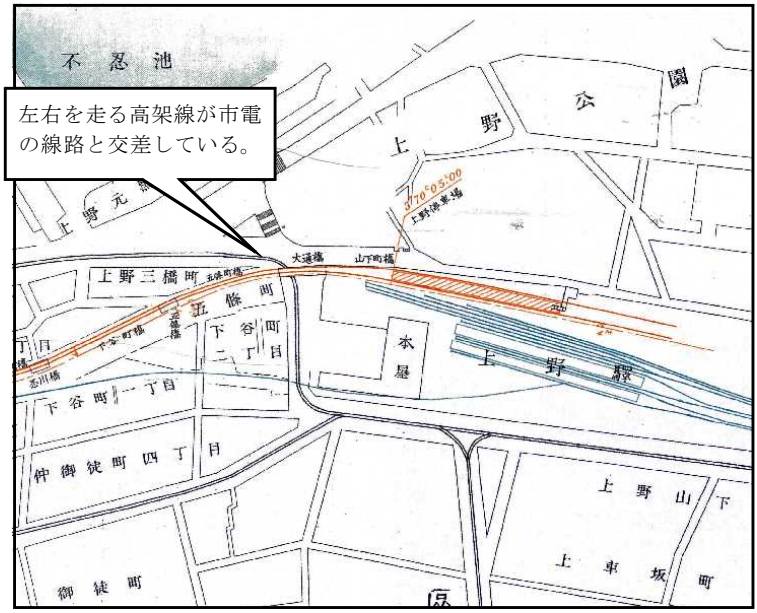
震災直後に東京市内の浅草区、本所区、下谷区、深川区など被害が甚大だった地域を中心に、東京だけではなく千葉県や神奈川県、埼玉県の被災者にも取材したルポルタージュに収められた被災者の声である。「九段坂下牛淵公園」の「住所不明四〇男」の証言として記録されているのだが、このような人物が帝都が復興していく五年、十年という時間軸の中で正常な生活を取り戻すかどうかと考えてみれば、その可能性は低いと言わざるを得ない。仮に仕事を得て、新しい家族を作って暮らしていったとしても、震災時のトラウマが完全

に解消されることはないだろう。このようにして生き残った被災者の中には、おそらく社会的な関係を切断されたまま浮浪人となり、どこかで命を落としたり、高架線工事現場の「洞穴」のような場所に吹き寄せられていったりした者がいたのではないだろうか。そして震災後に流入してきた被災地外の人びとによって加速する帝都復興の中で、切り捨てられ、忘れられていく。「高架線」に描かれた常軌を逸した「浮浪人」の群れは、震災後の表象空間において特有の含意を孕まざるを得ない。その特有の含意の内実は、「高架線」の都市空間を読み解くことで明らかにすることができる。

三、震災の都市空間と「高架線」

横光利一の「高架線」の舞台がどこであるのかについては、渥美孝子が次のような指摘をしている（5）。

当時、高架線と地下鉄道の工事が同時に行われ、しかも「交錯（クロッス）してゐる」場所が現実に一箇所、存在していた。上野―万世橋間の地下鉄銀座線の工事と、御茶ノ水―両国間（総武線）の高架線工事とが交差する神田・万世橋付近がそれである。小説の舞台として、浮浪人が多くたむろしていた浅草や上野公園などではなく、この場所が選ばれた理由はやはりこの垂直構造にあろう。



※地下鉄銀座線上野駅は高架線より浅草側（図中下側）にある。

確かに神田・万世橋付近は、高架線と地下鉄道が交差する特異な場所である。しかし実は、同様の条件を満たす場所がもう一箇所ある。上野駅の御徒町駅よりで、五條町橋と連結されている上野大通橋という高架橋が市電の路線と交差する場所である。地下鉄銀座線はこの市電の路線の真下に造られている。[前頁図参照]（6）

地下鉄銀座線の上野―浅草間は、一九二五年九月に着工され、一九二七年十二月に竣工。続く上野―万世橋間の工事は一九二七年二月に着工され、三〇年一月に竣工している。一方、上野―東京間の高架線は、震災直前から工事が始まり、一九二五年十一月に竣工。山手線の環状運転が実現した。

「高架線」が発表された一九三〇年よりも五年ほど前であるし、工事時期の重なりはわずかに二カ月ほどであるから、高架線と地下鉄の工事が同時に行われ得る時期という条件を十分に満たしているとは言えない。ところが、上野―東京間の高架線工事は一九二五年で完全に終わったわけではなかった。本来は同時に竣工するはずだった貨物線の工事が遅れ、秋葉原貨物駅までの貨物線が高架に切り換えられたのは一九二八年四月のことである。したがって、一九二七年二月から二八年四月までのおよそ一年間は、高架線と地下鉄の工事が上野駅の南側で同時に行われていたことになるのだ。保市が貨物線の踏切番をしていることもその傍証である。「高架線」の舞台が浮浪人が多くたむろしていた上野公園近くの工事現場であった蓋然性は高い。

しかも、「高架線」には、具体的な都市空間を想起させる次のような描写が盛り込まれている。

> 洞の中では、職業紹介所からあぶれて来た老人連が、だん〳〵多くなって来た。しかし、浮浪人らは仲間が増しても減っても同じであった。吹き込んでくる煤煙の中で、お洒落は手鏡を持って笑いながら終日自分の顔を覗いていた。

そもそも高助が浮浪人の夜警になったのは、町会が「紹介所から廻されてきた」からであった。そして浮浪人たちが吹きだまっている洞穴から、「近くに見える職業紹介所に並んだ労働者の群れ」が見えるだけではなく、「夕暮になって、靄のかかった鳥居の下を緋鯉のように泳ぎ出す芸者達の群れ」も見えるのだ。現在はハローワークとして存続している「職業安定所」の所在地の中に、神田、万世橋付近は見あたらない（7）。また、「芸者達」からは上野広小路が、「鳥居」からは上野東照宮や花園稲荷神社が想起される。

また、次のような描写が含まれていることも、「高架線」の舞台を暗示するものと考えることができる。

穴の中では、露出した埋設物の鉄管が、肋骨のように絡まり合ってじい〳〵音を立てていた。泥水の湧き上って来る下の方では、黒々とした古い土の断面の縞の中で、手足の壊された骸骨の頭が半面を仰向けたまゝ、静まっていた。

上野の寛永寺は最盛期には上野公園や不忍池を含む寺域を有していたというから、上野駅付近から死体が出てきてもまったく不思議ではない。また、付近には上野戦争の死者が埋葬されていた可能性も高く、「高架線」の舞台が上野であった蓋然性が高いことの傍証となるだろう（8）。

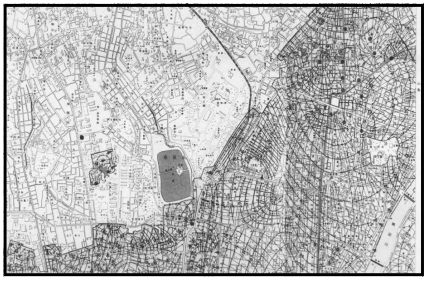
もちろんこれらは、「高架線」の舞台を実証的に明らかにすることができるということを主張するための材料ではなく、同時代の読者が「高架線」の都市空間をどのように読み解き得たかを明らかにするためのものである。

そして問題は、上野駅に近い場所が舞台となっていることによって、「高架線」という小説にどのようなコンテクストが導入されるのかということである。

四、延焼地域の辺縁に生きる人びと

帝都復興祭が行われた一九三〇年において、上野駅周辺がどのような地政学的な都市空間であったのかを考えるためには、関東大震災の延長地域を確認しておく必要がある。

たとえば、神奈川大学の「関東大震災 地図と写真のデータベース」に公開されている「火災延焼動態図」という動画を見ると、東京市の区全面積七九・四㎢のうち三四・七㎢と、四三・六％もの地域が消失し、日本橋区一〇〇％、浅草区九六％など、下町地域のほとんどが焼失したさまが動態として確認できる。ここでは、その動画の基になっている「東京市火災動態地図」［左図］（9）に拠って上野駅周辺の概況を確認しておこう。



右半分の細かく線が書き込まれている部分が関東大震災によって延焼した地域である。中央上部から弧を描いて下に向っているのが山手線の線路で、中央やや左下にあるのが不忍池だ。浅草や隅田川沿岸の住宅密集地から上野駅の方

向に炎が広がり、上野山のふもとで延焼が止まったことがわかるだろう。すなわち、「高架線」の舞台となった場所は、延焼地域と非延焼地域の境界領域にあるのだ。関東大震災後、多くの被災者が上野公園に集まり、炊き出しなどによって命をつないだ。やがて、自活の道を見出すことができた者は、上野公園を去って行った。自活の道を見つけられない者の中には上野公園にとどまり続けた者もいたに違いないが、関東大震災後に宮内省から東京市に払い下げられて上野恩賜公園として再整備される中で浮浪者たちは居場所を失い、その一部が「高架線」下の「洞穴」に集まってきたと想像することができる。つまり、常軌を逸した振る舞いを見せる「洞穴」の浮浪者たちは、都市化に伴って最下層に沈んだ労働者という階級的な問題を体現する存在であるというよりは、同時代的なコンテクストを導入する限り、関東大震災によって心理的な負荷を抱え込んでしまったために、社会関係の中でまともな生活をすることが困難になってしまった人びとの群れであると考えた方がよいのだ。そうなれば、たとえば浮浪者の一人が大量に集めた古下駄は、同じ数だけの大震災の犠牲者を表象するものであると考えることができるし、老人が身につけている必要以上の着物もまた、失われた家族のものであるか、少なくとも被災者の遺品である可能性が浮上する。鏡ばかり見ている男が抱えている女の化粧道具は、震災で命を落とした妻のものであるのだろう。老人が娘と孫を連れているという姿にも、失われた家族の存在が暗示される。男を選ばず身をまかせるお倉は、おそらく震災によって、そうしなければ生きていけない状況に追い込まれたのだろう。それは体を売らなければ生きるための糧を得られないという物質的な窮状なのかもしれないが、もしかすると、誰かと肉体関係を持ち続けなければ心の安定を保つことができないという精神的な窮状なのかもしれない。

こうして地震によって倒壊したり火災によって焼失したりするおそれのない、コンクリートの巨大な建造物の建築現場に身を寄せている浮浪者たちだが、やがて高架線の竣工とともにおそらく居場所を失うことになる。そうだとすれば、マッチを擦ったことがトリガーになったかのように喘息の発作に襲われ、「下界を足で蹴りつけ」ることによって高助が昇天したのは、浮浪者たちの未来を少しだけ先取りしただけのことに過ぎないのだ。

五、むすびに代えて

震災後に出現した新感覚派文学が、まったく新たな展開を

見せたのが新心理主義の時代であるという見立てが流布して久しい。しかし一九三〇年というのは、関東大震災が起きてわずか七年に過ぎない。もちろん、帝都復興祭によって震災後という時間に一つの区切りがもたらされたことは事実だが、少なくともそういう区切りを必要とするほどには、震災の後遺症が残存していたということもまた確かである。見てきたように「高架線」には、そうした震災の影が色濃く読み取れる。同様に、たとえば「機械」にも、震災後文学としての相貌を見て取ることができるだろうか。夙に指摘されてきているように、五万枚のネームプレートの注文が舞い込むところに震災後に行われた東京市の町名変更という現実がほの見えるし、九州の造船所から上京する「私」が、地方から東京への人口流入を象徴する存在であるという見方もできるだろう。しかしそれだけではない。金銭を持つと必ず途中で落としてしまうという主人の不可思議な性癖や、「まだ三つにもならない彼の子供」を溺愛する四十男という特異な設定には、精神的な失調を暗示しているようなところがある。そもそも「心理」に対する関心の醸成が震災後数年という時間軸の中で生起しているとすれば、そこに何らかの関連性をいったんは想定してみることは、決して無意味なことではないだろう。〈震災後文学〉という枠組みによって、一九二〇年代から三〇年代にかけての文学をどのような形で再評価しうるのか、さらなる探求が必要である。

注

（1）拙稿「震災後文学論序説―芥川龍之介・川端康成・梶井基次郎」（二〇一四年六月、『現代文学史研究』第20集）で指摘した。

（2）初出、一九三〇年九月『中央公論』。

（3）初出、「横光利一・「機械」その他―《関係性》の中で―」（一九八五年五月、『土浦短期大学紀要』32）。引用は、玉村周著『新視点シリーズ日本近代文学6 横光利一』（一九九二年一月、明治書院刊）による。

（4）渥美孝子「「高架線」から「機械」へ―昭和五年の横光利一―」（二〇〇六年三月、『横光利一研究』第四号）

（5）同右。渡辺育雄「「高架線」に関わる資料的エッセイ―〈襤褸の群〉の意味するもの―」（一九八八年九月、『日本文学論叢』17）にも、「当時の浅草―上野―万世橋あたりの鉄道工事現場に寄生する浮浪者の群」という指摘があり、同時代の歴史的なコンテクストへの言及がある。ただし、高架線と地下鉄線が交差する場所を具体的に同定しておらず、保市が番をしている踏切を「路面電車」

のものとするなど、「高架線」の描写と合致しない考察が含まれている。

（6）「第壹圖　市街線東京上野間線路平面圖」（部分）。鐵道省 編『東京市街高架線東京上野間建設概要』（大正十四年十一月一日発行　鐵道省）。画像データは国立国会図書館近代デジタルライブラリーによる。

※永続的識別子 info:ndl.jp/pid/978553

（7）神田、万世橋の近くにある職業安定所として想起されるのは飯田橋だが、距離的には上野の方がむしろ近い。

（8）鹿島建設株式会社のウェブサイト内にある『鹿島の軌跡』「第七回上野の歴史」によると、昭和五年三月に着工した上野駅本館基礎工事において地面を掘り下げたところ、「根堀開始まもなく白骨、刀剣、槍、鉄砲を掘り当てる。相前後して作業員の事故も相次ぐ。そこでこれら上野戦争での遺骨を集め、大供養を行った」という。http://www.kajima.co.jp/gallery/kiseki/kiseki07/index-j.html

（9）文部省震災予防調査会 編『東京市火災動態地図』（大正十三年、文部省震災予防調査会刊）。画像データは国立国会図書館近代デジタルライブラリーによる。

※永続的識別子 info:ndl.jp/pid/981890

（のなか・じゅん）

「現代文学史研究会」入会案内

1　現代文学史研究会は、主に一九二〇年代以降の日本文学に関する研究及びその普及を図り、我が国の文学研究の改善・向上に寄与することを目的として、現代文学史研究所（大久保典夫所長）が設立した団体です。この会の主な活動は、機関誌『現代文学史研究』の発行と、研究集会および合評会の開催などです。

2　機関誌『現代文学史研究』は、年二回刊（六月・十二月）で、研究論文・文芸批評・エッセイ等を掲載します。

3　入会申込に際しては、所定の用紙に必要事項を記入して郵送するか、電子メールでご連絡下さい。申込書が必要な方は、事務局までご連絡下さい。振替用紙などの書類一式をお送り致します。（年会費六千円）

4　電子メールで申込む場合は、入会の意志を明記し、住所・氏名・電話番号・所属・メールアドレスを記入して送信して下さい。

5　入会には、事務局（事務局長・野中）で申込が受理され、所長（大久保典夫）の承認を得ることが必要です。

現代文学史研究所事務局
〒215-0027　川崎市麻生区岡上一二五―四
電話＆FAX　〇四四（九八六）三七六〇
e-mail:gendaibungakushi@yahoo.co.jp
振替　〇〇二八〇―〇―九二七二八